

第102号

研究所報

三好教育研究所

令和3（2021）年度

ごあいさつ

「三好教育研究所所報 第102号」の発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。三好教育研究所では、本年度も「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成」を研究主題に、三好郡市内各園各校のご協力をいただきながら、研究・研修活動を行ってまいりました。

今年度の研究発表会では、三縄（白地）幼稚園、辻小学校からすばらしい研究実践報告をいただくとともに、徳島県立総合教育センター特別支援・相談課樋口直樹指導主事の講演「ポジティブな行動支援で幸せな園・学校づくり」を拝聴し、共に研修を深めました。特に、今回はコロナ禍の影響もあり、ズームを使ったオンライン研修という今までにない新しい形での実施となりましたが、関係各位のご協力により、大きな混乱もなく無事開催することができました。事後のアンケートにおいても、多くの会員から「たいへん有意義であった」「今後もオンライン研修の形で実施してほしい」との声をいただいています。

また、若手教員の採用研修や中堅教員・管理職に対する学校運営研修、小教研情報部会との連携によるICT教育の推進などにも取り組んできました。さらに、この研究所報には、7名の委嘱研究員の先生方から、研究主題・テーマに沿った研究実践についての報告をいただきました。おまとめいただいた貴重な研究成果は、各園各校の先生方の今後の教育実践に大いに役立つものであります。ぜひご覧いただき、参考にしていただければ幸いです。ご寄稿いただいた先生方、本当にありがとうございました。

さて、今年度から、幼・小・中全ての校種で新学習指導要領が全面実施となりました。新学習指導要領の趣旨である「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメントの充実」「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」を実現する教育が求められています。また、「ウイズコロナ」「ポストコロナ」の時代を見据えながら、様々な面でこれまでの教育の在り方を見直し、新しい日常、新しい教育活動を取り入れた実践も必須です。加えて、GIGAスクール構想により導入された一人一台端末の有効活用、令和の日本型学校教育の実現など、時代の要請に応える教育も展開していかなければなりません。本当に大変な状況ではありますが、10年後の未来を見据えながら、急激に変化する社会の中でも、心豊かにたくましく生き抜くことのできる三好郡市の子どもたちの育成に、共に取り組んでまいりましょう。三好教育研究所もその一助を担えるように鋭意努力してまいります。

最後になりましたが、これまで本研究所の諸事業に対しまして、関係の皆様にご指導ご協力をいただきましたことに心よりお礼申し上げますと共に、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をいただけますようよろしくお願いいたします。

令和4年3月

三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

目 次

あいさつ

三好教育研究所 所長 田岡 茂樹

—— 委嘱研究員研究 ——

- 一人一人の幼児の発達を保障する幼稚園教育の創造 1
～様々な自然体験や人との関わりを通して豊かな感性を育てる保育のあり方～
辻幼稚園 主任教諭 佐藤 知美

- 教科での学びをより確実なものへとするための
小学校低学年でのプログラミング教育を目指して 4
～生活科「あきとなかよし」の学習を通して～
足代小学校 教諭 榎山 万莉菜

- 主体的に感染症予防に取り組む児童の育成をめざして 7
～新型コロナウイルス感染症から、感染症の仕組みや予防方法を学ぶ～
王地小学校 養護教諭 笹田 季生

- 低学年におけるタブレットを用いた効果的な実践 10
～発達段階に合わせた活用方法を考えて～
池田小学校 教諭 中妻 美穂

- 数学的な見方・考え方を働かせる授業の在り方 13
～児童が「やってみたい！」と思う楽しい授業作り～
下名小学校 教諭 齋藤 早織

- 自他の大切さを認め、互いに支え合える仲間づくりをめざして 17
～生徒の成長を信じた指導・支援のあり方～
池田中学校 教諭 徳善 咲紀

- 自尊感情を高める豊かな人間性の育成 20
～自分を愛し、他人を思いやる心あふれる人間関係づくりの育成を目指して～
山城中学校 教諭 仁尾 芳人

- 令和3年度 教育研修・研究事業報告 23

- 歴代委嘱研究員一覧（平成元年～） 25

研究主題

一人一人の幼児の発達を保障する幼稚園教育の創造

～様々な自然体験や人との関わりを通して豊かな感性を育てる保育のあり方～

辻幼稚園 主任教諭 佐藤知美

1 はじめに

幼児は、生活の中で様々なものから刺激を受け、新しい発見をしたりその中にある面白さや不思議さなどを感じたりして遊びを深めていく。幼児期には、自分を取り巻く環境を全身で感じ取り、感動や発見を喜び、その中で試行錯誤を繰り返しながら知的好奇心を満足させる。さらに、創造力や感性をはぐくみ、人との関わりの中で様々な出来事を通して嬉しい、悲しい、楽しいなどの感情体験を味わうようになる。自然や人と深く関わり、様々な体験を繰り返す中で、気づいたり感じたりする感覚が磨かれ、豊かな感性の育みとなる。その中でも、自然との出会い・関わりは、豊かな感情や好奇心を育み、思考力や表現力の基礎を形成する重要な役割をもっている。

しかし、近年子ども達を取り巻く環境を考えると、子ども達の遊び場や人との豊かな関わり、触れ合いは減少している。本園でも、幼児の友達との関わり方や遊びの様子を見ていると、遊びに持続性がなかったり、次々に遊びを変えたりして遊びの広がりが見られないことが多く、自分の思いをうまく相手に伝えることが苦手だったり、大声で叫んだり、場に応じた態度が身についていない幼児の姿が多く見られる。そこで身近な自然と人との関わりを通して豊かな感性を育み、幼児自身が主体的な生活を送るためにはどのような教師の関わりや環境構成が必要かを、実践を通して考えていきたい。

2 研究の方法と実践

(1) 園および園児の実態

本園は、近くに井内谷川が流れ、園舎から望む山々は四季折々の姿を見せるなど、園児が1年を通して自然を楽しむことのできる豊かな環境にある。近年、園児数が減少傾向にあり、本年度の園児数は11名（4歳児4名、5歳児7名）と少人数であるが、明るく、活発な幼児が多く、毎日園舎からは園児たちの元気な声が響いている。降園後や長期休業中には、全園児が預かり保育を利用し、多くの園児が幼稚園で過ごす時間が増えている。今年度は、4歳児・5歳児の異年齢混合クラスとなり、進級当初5歳児は、環境の変化に戸惑う姿が多く見られた。

(2) 研究の視点

- ①自然や人との関わりを通して、豊かな感性を育てる保育のあり方を事例を通して考察する。
- ②幼児が自主的な生活を送るためには、どのような環境構成や援助が必要であるかを考える。
- ③日々の保育を振り返って、保育環境の果たす役割を考え、その改善や充実を図る。

3 実践事例

(事例1) 「どんなチョウチョ？」 6月下旬(4歳児)

パンジー・ビオラのプランターで幼虫を見つけたA児。近くにいたT児が「ツマグロヒョウモンの幼虫じゃ。」と教えてくれた。「先生、ツマグロヒョウモンの幼虫飼ってもいい？」とA児。教師は飼育ケースを準備し、A児と一緒に土を入れたりビオラの花を入れたりしながら飼育の準備を始めた。「これも入れてあげたら幼虫さん喜んでくれるかも。」と木の枝や石をもってきて飼育ケースの中に入れていく。「早くチョウチョにならんかな。ツマグロヒョウモンってどんなチョウチョかなあ？」とA児は嬉しそうに飼育ケースを運んでいた。

(省察)

入園当初から戸外で活発に遊ぶ中で、ダンゴムシなどの生き物に興味を持ち始めていたA児。様子を見てみると、ツマグロヒョウモンの幼虫を触るのは初めてのようだった。A児が生き物に興味や関心を持ち始めていた時期だったので、教師はじっくりと関わりを持ち、A児の考えや気持ちに寄り添いながら飼育準備を始めた。

明るく気の優しいA児は、生き物に対しても優しい言葉かけが多く、「何を入れてあげたらいいんだろう？ どうしたらツマグロヒョウモンの幼虫が喜んでくれるのかな？」と一生懸命考える姿が見られた。そんなA児の姿を見た他の幼児もツマグロヒョウモンの幼虫を飼育したいという気持ちが生まれたのか、数人の幼児がA児と同じように飼育を始めた。一人遊びが多かったA児だったが、この頃から友達との関わりも増え、他の幼児と一緒に虫捕りを楽しむ姿が見られるようになった。また、A児の「ツマグロヒョウモンってどんなチョウチョかなあ？」という疑問に対し、教師が調べるのではなく幼児が自ら進んで調べ、様々な発見や気づきが生まれるよう図鑑を用意したり年長児との関わりを増やしたりしながら様子を見るようにした。その後、図鑑でツマグロヒョウモンの成虫を見つけた年長児がA児に教えてあげる姿が見られた。

一緒に図鑑を調べることで、友達と気持ちや考えを共有し、相手の考えを聞いたり相手に認められたりする中で、自分に自信を持ちのびのびと自己発揮できるようになるのではないだろうか。



(事例2) 「大きな家づくり」 7月上旬(5歳児)

ある日、Y児が「家の前におったよ。」と小さな手にオニヤンマを捕まえてきた。園には小さい虫かごしかなく、体の大きなオニヤンマはすぐに弱ってしまうと思った教師は、Y児に「元気なオニヤンマ。広いお空が好きやけん、元気なうちに逃がしてあげようね。」と伝えた。すると、Y児は悲しそうに「いや。幼稚園で飼う。」と言ってなかなかその場を動かなかった。Y児の思いを受けとめ、一旦オニヤンマを虫かごに入れ、様子を見ることにした。しばらくすると、Y児とK児が何かを作り始めた。教師が「何作ってるの？」と見に行くと、「大きな家作ることにした。」と大きな空き箱や段ボールなどを使ってオニヤンマの家を作っていた。2人で「息ができるように穴開けておこう。」「ここはオニヤンマが見えるように透明にしよう。」と考えを出し合い、協力しながら製作を楽しむ姿が見られた。

(省察)

今まで自分の思いを相手に認めてもらえなかった時は、泣き出し自分の殻に閉じこもることの多かったY児であったが、友達の声かけによりスムーズに気持ちの切り替えができたことに驚いた。一緒に製作をしていたK児も生き物が好きでよく一緒に虫捕りをしていたこともあり、Y児はK児のアイデアを受け入れることができたのではないだろうか。そして、「大きなオニヤンマは狭いところではすぐに弱ってしまうという」生き物の特性を考え、大きな空き箱を使って家を作ることを考えたのだと思う。その後、給食前に教師が「大きなおうちでも、広いお空飛べんかったら元気なくなってしまうよ？」と伝えると、納得したY児はK児や他の幼児と一緒にオニヤンマを逃がしてあげた。

2人のやり取りを聞いていると、年長児ならではのアイデアがたくさん生まれ、幼児の成長を感じることができた。その後、他の幼児にも2人の作品を紹介する時間を作ることにした。そうすることで、それぞれ自分の考えを伝え、友達の良いところを認め合える仲間づくりができていくのだと思った。

今回の事例のように、幼児達に生き物の特性を伝えながらも、幼児の言葉に耳を傾けながら、一人一人の思いや考え方を尊重し、今後も幼児の心の動きに柔軟な対応をしていきたい。



4 おわりに

今回の実践を通して、幼児が豊かな感性を育てていくためには、実際に幼児の生活する姿や遊ぶ姿から、活動の方法や環境の構成の仕方を考えていく大切さを学んだ。また、幼児は与えられた環境の中だけではなく、幼児自身が興味や関心を持ち、考えたり試したりしながら主体的に生活を送る中で、感じる心やもっと知りたいという探究心など、豊かな感性が育まれていくのだと感じた。また、教師は幼児自身が興味や関心を持って主体的に関わり、心が動かされるような環境を整えておく必要があると考える。教師自身が身近な自然と関わる中で、心を動かす体験をしていくことで教師自身の感性を育てていくことも大切である。今後も、幼児が友達や教師と感じたことを共有し、いろいろな感情を持ち、感性や想像力が磨かれるよう、日々の保育に取り組んでいきたい。

教科での学びをより確実なものへとするための
小学校低学年でのプログラミング教育を目指して
～生活科「あきとなかよし」の学習を通して～

足代小学校 教諭 榎山万莉菜

1 はじめに

学習指導要領の改定において、2020年度から小学校にプログラミング教育が必修化された。また、今年度は、GIGA スクール構想の実現により1人1台タブレットも導入された。しかし、低学年のプログラミング教育の実践事例はとてまもなく、どのように取り組めばよいのかわからずなかなか進んでいないのが現状である。

2 研究の目的

本校では、今年度「学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの」(B分類)を中心にプログラミング学習に取り組んでいる。しかし、小学校低学年でのプログラミング学習は、実践事例も少なく、プログラミング教材の選択や操作方法等、基本的なところから研究していかなければならない。

このことから、第1学年生活科「あきとなかよし」の単元を通して、どのようにプログラミング教育を進めていくことができるのか、また、学習指導要領に示されているプログラミングをどのように組み入れていくのかを具体的に考えて、学習目標を達成していくために進めていく必要があると考え、本研究に取り組んだ。

3 研究の実践

(1) 夏と秋の生き物の違いを見つける

夏と秋の生き物の違いを見つけるために、実際に校庭を探検した。そこで、夏にはいなかった生き物があることに気づき、いろいろな生き物を見つけることができた。生き物を見つけている中で「何を食べているんだろう。」「どこに住んでいるんだろう。」など生き物に関する疑問の声が聞こえてきたので、実際に教室で飼うことにした。



(2) 実際に生き物を飼育

校庭で見つけたトノサマバッタ、ショウリョウバッタ、オンブバッタ、カマキリ、コオロギ、ダンゴムシ、テントウムシ、近くの神社で見つけたミミズ、ウマオイを飼育した。飼育する中で、分からないことがあると図鑑を見て調べている児童もいた。そこで、見つけた生き物をプログラミング教材「Viscuit」を使って「世界で一つの秋の生き物図鑑」を作り、幼稚園児を招待して、紹介することにした。



(3) 「世界で一つの秋の生き物図鑑」作りに向けての準備

①分かったことをロイロノート（フィッシュボーン）にまとめる

飼育していて知った生き物のすみかやえさ、体の動きなどをロイロノート（フィッシュボーン）にまとめたロイロノートは、それまでの授業でも活用していたため、児童はスムーズに取り組むことができた。ロイロノートにまとめていくことで、飼育して分かったことや知りたいこと、飼育する中で観察しなければならないことなどを整理することができた。



②完成図を描く

実際に、完成図を描いてみて作りたい作品をイメージさせた。完成図を描くことで、「こんな生き物図鑑をつくりたい」という意欲を高めることができたとともに、実際に作っていく中でも、参考にすることができた。



(4) プログラミング教材「Viscuit」を活用した「世界で一つの秋の生き物図鑑」作り

①必要な部品作り

必要な絵（部品）を描き出した。先に絵（部品）を描くことで、後から動きをつくる時に、動きの方に専念することができる。また、図鑑やインターネットでそれぞれの生き物の足の数など体の特徴も押さえながら描くことでより、生き物をしっかり観察する力もついてきた。



②動きをつける

はじめに、生き物とすみかを作った。その中で、児童から「生き物はすみかの所に隠れていた。」という意見が出たので生き物のすみかを押しすと生き物が出てくる動きを作ることにした。次に、生き物に動きをつけた。児童の意見から、動きには、歩くやえさを食べる、飛ぶなどが挙げられたので飛ぶ動きや歩く動きを中心に進めていった。グループで活動を進めることで、児童同士で教え合う様子が見られた。児童から「〇〇さんのトノサマバッタが上と下に飛んでいてすごい。私もしてみたい。」「〇〇くんのダンゴムシを触ると丸まるよ。」など友達の作品の良いところがたくさん出てきた。また、見つけた良いところを友達に聞いて同じように動きをつくりうまく動かないときにはグループの友達同士で試行錯誤しながら協力して改良している姿が多く見られた。体の動きや飛ぶ動きができると、えさを食べる動きにも取り組んだ。はじめは、えさが突然出てくる動きになっている児童もいたが、児童同士が話し合う中で「えさは突然出てこないから動く中でえさに近づくと食べるようにしましょう。」という意見が出て、それ



ぞれの生き物が飛んだり歩いたりして動く中でえさに近づいて食べる。そして、また、動いていく様子を作り生き物図鑑の完成に向けて取り組んだ。



(5) 「世界で一つの秋の生き物図鑑」まつり

幼稚園児を招待して、完成した生き物の図鑑を実際にタブレットを触ってもらいながら紹介した。自分の作品のアピールポイントを伝えたり、「土を触ると、ミミズが出てくるよ。」と紹介したりしている姿が見られた。また、幼稚園児から、「コオロギは何を食べているの。」と質問されると「コオロギは、煮干しも食べるんだよ。」と飼育して分かったことを伝えていた。一生懸命作った作品を紹介することができて、とても満足している様子が見られた。



4 成果と課題

今回、生活科「あきとなかよし」の学習を通して、児童が毎時間、とても意欲的に活動する姿が見られた。はじめは、生き物を触ることができなかった児童も、飼育を通して少しずつ触れるようになったり、えさを図鑑で調べる様子が見られたりするなど、生き物に対する興味・関心を高めることができた。また、プログラミング教材「Viscuit」を使って「世界で一つの秋の生き物図鑑」を作る中で、「より本物に近い動きをつくりたい」という気持ちから改良していく姿が見られ、プログラミング的思考力も養われたと考える。グループ活動では、児童同士で教え合ったり、動きをよりよくするために思考錯誤したりする姿などが多く見られ、主体的な活動の中で学びが深まっていった。児童から、「また、自分で生き物図鑑をつくりたい。」や「次は、生き物がえさを食べてしばらくすると、赤ちゃんが出てくるようなうごきを作りたい。」という意見を聞くことができ、次の活動への意欲も感じることもできた。そして、「また生き物を飼ってみたい。」「これからも生き物を大切にしたい。」という本単元の目標でもある生き物への親しみや命を大切にすること、生き物への興味・関心を高めることにつながった。

しかし、「Viscuit」の無料版では、児童同士が作品を見せ合うことができないため、機能面において、限界があると感じたので、今回は有料版を購入し、学習を進めた。プログラミング教育が本格化しようとしている中、市町村が必要なソフトを一括購入するなど学習環境を整えていくことも大切だと感じた。

5 おわりに

今回の実践を通して、小学校低学年でも「学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの」(B分類) におけるプログラミング教育は可能であると感じた。そして、プログラミングを取り入れたことで、さらに効果的に教科の目標を達成することができたと考える。また、友達の作品の良いところを認め合う場面も見られ、学級全体のよりよい人間関係を築くこともできた。そして、互いに認め合う心が育まれ安心できる学級づくりにつながったのではないかと思う。今回の研究での経験をもとに、今後もより効果的なプログラミング教育の実践を進めていきたい。

研究主題 主体的に感染症予防に取り組む児童の育成をめざして
～新型コロナウイルス感染症から、感染症の仕組みや予防方法を学ぶ～

王地小学校 養護教諭 笹田 季生

1 はじめに

本校は全校児童51名の小規模校である。素直で真面目な児童が多く、勉強やスポーツにも熱心に取り組んでいる。児童同士も仲が良く、休み時間には学年の枠を超えて遊んでいる姿が見られる。

一昨年度から続く新型コロナウイルス感染症流行に伴い、本校でも感染症対策に取り組み、健康診断や運動会、校外学習等の行事を実施してきた。しかし、昨年度の初期の流行時と比較し、手洗いやマスクの着用、ソーシャルディスタンス等の感染症への危機意識の低下が課題であると感じていた。

2 研究の目的

学校全体で感染症対策に対する意識の高揚と習慣化を徹底していくためには、児童自身が感染症の仕組みや予防方法を理解し、正しい行動に移すことが大切であると考えた。そこで児童が主体的に取り組んでいくために、6年生を対象に本研究に取り組むことにした。

3 研究の方法と実践

(1) 感染症を理解させるための取組

① 動画から学ぶ感染症の仕組み

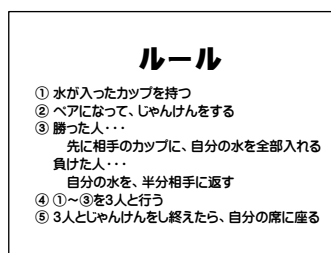
全校児童を対象に、NHK「“可視化”でまるわかり！新型コロナ対策の新常識」の4本の動画を全学級で視聴させ、換気・マスクの重要性や飛沫・接触感染の仕組みを認識させた。目に見えないウイルスや飛沫・換気の様子を視覚的に捉えることで、感染症対策の重要性を全校で共通理解することができた。

② 「病気の予防」の授業実践（6年生）

ア 第1次「病気の起こり方」

6年生の体育科保健領域で、学級担任と連携した授業実践を行った。この授業では、酸性とアルカリ性の特性を利用し、感染症が人から人へ感染していく様子を可視化した実験をゲーム形式で行った。

授業後には、「短時間で感染が広がることが分かった。誰が感染しているかも分からないから怖いと思った。」や「感染症にかからないように手洗いやうがい、消毒をしっかりとって、健康な体でいようと思う。」等の感想があり、目に見えないウイルスの怖さを体感することができた。



【ゲームのルール】



【ゲームをしている様子】

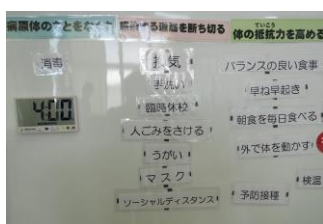
イ 第2次「病原体と病気」

この時間には、感染症の3つの予防方法（①病原体のもとをなくす②感染する道筋を断ち切る③体の抵抗力を高める）に沿って、本校の感染症対策の見直しを行った。

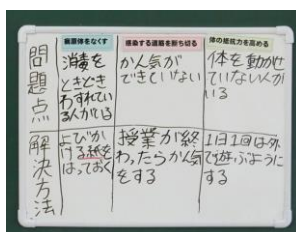
まず、本校の感染症対策の課題を理解するために、事前にとったアンケートやソーシャルディスタンスが出来ていない写真を提示し、本校の感染症に対する予防意識の低下を示した。

課題を共通理解した上で、①から③の3つの感染症予防の観点から、本校の感染症対策の問題点と改善方法をグループに分かれて考えさせた。

これまで学習してきた内容をもとに、自分自身の生活を振り返り、本校の感染症対策の課題や解決方法を考えることができた。



【板書】



【話し合いで考えた意見】



【話し合いの様子】

(2) 児童の主体的な取組

① 消毒作業の開始

全校児童を対象に、これまで教職員が行ってきた消毒作業を児童自身で実施させる取組を始めた。はじめに、(1)①で視聴した動画をもとに、身の回りの物を清潔に保つことの重要性を理解させた。その後、消毒方法を統一させるために、保健委員会の児童が各学級を回り、机やイスの正しい消毒方法を提示した。それらを参考に、各自で下校前に自分の机やイスの消毒作業を開始した。加えて、1年生を除いて消毒液は個人持ちにし、校外学習や修学旅行等にも持たせ、手指消毒の徹底も図った。



【消毒方法の説明の様子】



【机の消毒をしている様子】

② 児童会・保健委員会の児童による劇

6年生での授業実践後、見直した感染症対策を全校に広げるために、児童会・保健委員会の児童9名で劇を行った。自身の生活を振り返りやすいように、学校生活の再現をしながら、手洗いや消毒・マスクの着け方やソーシャルディスタンス等の正しい感染症対策を示した。台本から衣装作成までを児童主体で行い、低学年でも分かるようなポーズやイラストも考え、楽しく学べる内容に工夫した。

劇が終わると、友だちと距離が近かった低学年も意識して取り組んでいる様子が見られた。



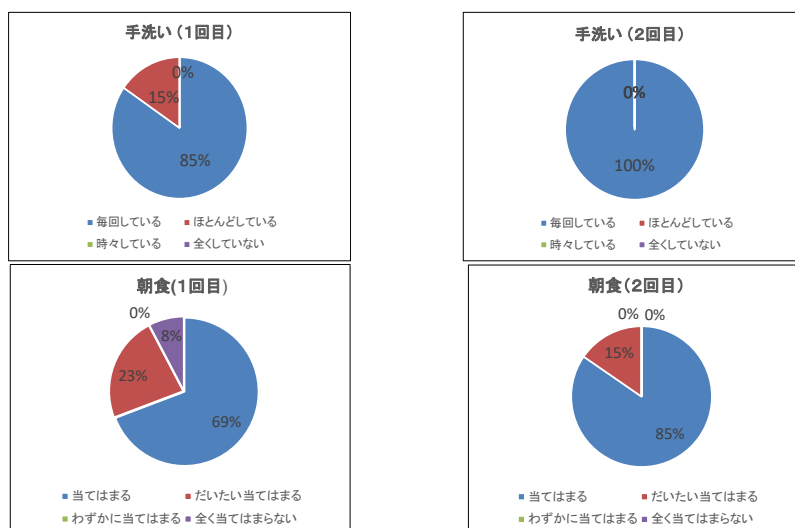
【劇の様子】

4 結果と考察

実践前後に、6年生を対象に「生活・病気に関するアンケート」を実施した。その結果、「食事の前や外遊び、トイレの後には手洗いをしていますか。」という問いでは、毎回していると回答した人が85%から100%に増加した。この理由として、動画や実験、手洗いチェッカー等で、ウイルスや感染経路を視覚化した指導により、正しく感染症を恐れ、正しく行動に移すことができたのだと考える。また、授業実践後には児童同士で声をかけ合い、積極的に手洗いや机の消毒をする様子が見られ、感染症に対する予防意識が向上したのだと感じた。

生活面においては、「朝食を毎日食べていますか。」という問いに対して、当てはまると回答した児童が、実践後は16%増加した。また、全く食べていないと回答した児童はいなかった。この理由としては、授業実践や集会における保健指導において、体の抵抗力を高めるために必要な生活習慣について、粘り強く指導したことが挙げられる。授業後の児童からも、「朝食を食べるなどの自分の生活の仕方によっても、感染症を予防できることが分かった。これから自分の生活を見直していきたい。」等の感想が多くあり、自らの生活の課題を改善するきっかけになったと感じた。

しかし、何よりも、児童主体となって感染症対策の課題や解決方法を考え、劇等で情報発信していく中で生まれた最高学年としての自覚や責任が、感染症に対する予防意識の向上にも繋がったのではないかと感じた。



5 おわりに

今回の研究では、6年生や委員会の児童がリーダーシップを発揮したことで、学校全体が感染症対策に意欲的になったと感じることができた。しかし、未だ検温の習慣化や生活習慣の改善等の課題は残されており、解決には家庭との協力・連携も必要だと考える。来年度は、家庭や地域にも積極的に最新の情報や知識を発信し、協力を仰ぎながら、課題解決に向けて意欲的に取り組んでいく。そして、管理職をはじめとする教職員と連携しながら、児童が主体的に健康課題を発見し、改善を図っていける健康教育に取り組んでいきたい。

〈参考文献〉

- ・NHK, “可視化” でまるわかり！新型コロナ対策の新常識, 2020.6.17
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/special-program_0617/
- ・青森保健所, 新型コロナウイルスに対応した施設の消毒方法について, 2020.4.3
<https://www.city.aomori.aomori.jp/kansensho-taisaku/kansensyo5.html>

低学年におけるタブレットを用いた効果的な実践 ～発達段階に合わせた活用方法を考えて～

池田小学校 教諭 中妻美穂

1. はじめに

文部科学省における「GIGA スクール構想」が進み、今日では、タブレット端末の活用により、個別最適化された学びや創造性を育む深い学びに繋がることが期待されている。今年度より、三好郡市でも1人1台ずつタブレットが支給された。しかし本当のところ、使い方や活用方法がよくわからないまま本年度がスタートし、一方では積極的にタブレットの活用が求められ、戸惑うことが数知れずあった。特に低学年の児童は、タブレットを使用すること自体が難しく、キーボードで文字を入力することも困難であるため、どう使っていけばよいのかすごく悩んだ。そこで、少しでも同じ悩みを抱える先生方のためになればと思い、低学年におけるタブレットを用いた効果的な実践を自分なりに考え、本研究を進めてきた。今回は、第2学年での実践例を紹介する。

2. 実 践

(1) カメラ・録画機能を使って

①野菜の成長を記録・観察する（生活「大きくそだて わたしの野菜い」）

自分達が育てている野菜の写真を撮影し、成長過程を記録していった。種を植えてから収穫するまでの写真を見比べることによって、姿が徐々に変化していく様子がよくわかり、植物の成長や生命力を実感することができる。

タブレットで撮影した写真は、見たいところを容易に拡大して見ることができる。実物を見ながら絵を描くのが苦手な児童も、その写真をよく見て丁寧に観察カードに描くことができていた。また、写真に撮って自分の席に戻って観察することができるので、夏の暑い時期に長時間外で観察する必要がなくなり、熱中症対策にも繋がった。しかし、実際に触ったり匂いを嗅いだりしながら観察することも大切である。タブレットを用いるメリットもあるが、実物に触れることの大切さを忘れてはいけないと感じた。



②話し合いの様子を録画し、振り返る（国語「うれしくなることばをあつめよう」）

この単元は、今まで言われて嬉しかった言葉について、少人数で話し合いをする単元である。3人グループになり、自分達が話し合うところを録画した。まだ3人以上で話し合うことに慣れていなかったため、1回目の話し合いでは、2人だけで話をしてしまうグループや、やりとりが続かないグループが多かった。そこで、各グループで録画した映像を見て振り返りを行った。すると、自分達の話し合いの様子から「〇〇さんが話せてないよ」「次はこんな質問をしたらどうかな？」と主体的に解決策を考えるようになった。話し合いの様子を録画しておくことで、意欲的に話し合いに参加している児童や、声掛けが必要



な児童がよくわかり、教師側も支援や評価をするのにとっても役立った。

(2) 授業支援アプリ“MetaMoJi”を使って

①説明を聞いて絵を描き、よりよい説明の仕方に気づく（国語「ことばで絵をつたえよう」）

この単元では、絵の描き方を題材に、相手にわかりやすい説明の仕方について学習する。単元の導入で MetaMoJi のモニタリング機能を活用した。

まず1回目の説明(よくない例)を聞かせて絵を描かせた。

丸をかいてください。もうひとつ丸をかいてください。
四角をかいてください。目をかいてください。これで、
雪だるまの絵のできあがりです。

(1 回目の説明)



(2 回目の説明)



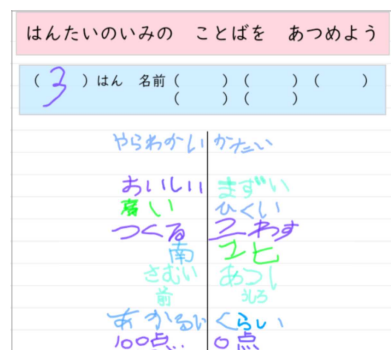
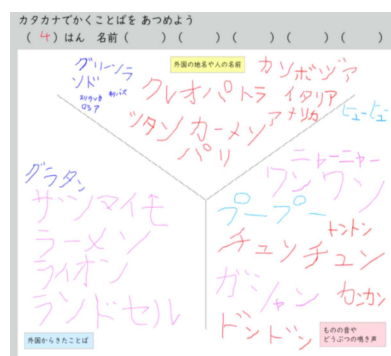
絵が描けたところで、モニタリング機能を使って全員が描いた絵を前に映し出した。同じ説明を聞いたのにもかかわらず説明が不十分なためにそれぞれの描いた絵が少しずつ異なっている。モニタリングで全員の絵を見比べることによって、児童は“どこに”“どんな大きさで”“どのような形を”描くのか説明がないと正しく描けないことに気づくことができた。

2回目は、教科書の例をもとにした説明を聞かせて絵を描かせた。すると、ほとんどの児童が同じ絵を描くことができた。「どんな言葉がわかりやすかったか」を問うと、順序を表す言葉(はじめに・つぎに・さい後に)や、形や大きさ、場所を表す言葉、最初に“何の絵を描くか”を伝えることが大切だとわかり、次の学習へと繋げることができた。

②班ごとに言葉集めをする（国語「かたかなで書くことば」「はんたいのいみのことば」）

MetaMoJi のショーケース内にある、思考ツールのワークシートを用いて、班ごとに言葉集めを行った。事前にグループ設定をしておく必要はあるが、タブレットを使うことで一枚の紙に児童が密になって書き込む必要がない。また、一人ひとり好きな色のペンで書かせることによって、誰がどのくらい意見を書き込んでいるかが一目でわかる。反対に、あまり書けていない児童もわかるので声掛けもしやすい。設定を変えれば、他の班でどんな言葉がでてきているのか、児童同士がリアルタイムで見ることできる。まだどこの班も見つけていない言葉を見つけようと、意欲的に探している児童の姿も見られた。

低学年の児童は筆圧が強く、字を書くこと自体に十分に慣れていないため、タブレットに手書きで長い文章を書くことは難しい。キーボードで打ち込むことはなおさらである。今回のような言葉集めや、作文を書く前の構想を考える時に使うなど、気軽に考えを書いたり整理したりする使い方が発達段階に適していると言える。



③図を使って自分の考えを説明する（算数「かけ算(2)図やしきをつかって」）

かけ算(2)の最後の学習のところである。本時は、L字型に並んだ○の数をかけ算を使って工夫して求め、その解き方を説明し合う活動を取り入れた。

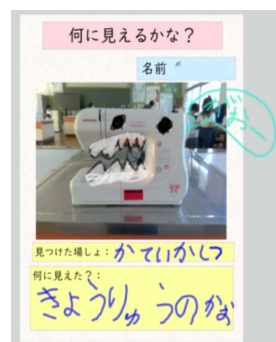
タブレットには図だけを示し、同じ数のまとまりを見つけ丸で囲ませた。式や説明はノートに書き、あえてタブレット上には書き込まないように指示をした。後に、図だけを見てその友達はどう考えて解いたかを全体に考えさせるためである。またレイヤーを切り変えてワークシートを作り、図の一部分を自由に動かせるようにした。それに気づき、図をL字型から四角の形に変え、1つの式で解く方法を見つけている児童もいた。第4学年の求積の学習に繋がる考え方である。

隣同士で説明し合う際にも、タブレットの画面を見せながら話すことができ、全体の前で発表するのが苦手な児童も気軽に説明に挑戦することができていた。タブレットの活用は、一人ひとりの学習の機会を保障するツールにもなる。



④撮った写真に文字や絵をかき込み、紹介し合う（図工「ともだち見つけた!」）

この題材は、身の回りにある自然や造形物から、形の楽しさや面白さを見つけることをねらいとしている。まず、校舎内を歩き回り「おともだち」に見えるものの写真をたくさん集めた。カメラを通して見ることで視点が焦点化され、今までは気づかなかった新しい見方に出会えたようである。たくさん撮った写真の中からお気に入りの一枚を選び、写真に文字や絵をかき込ませた。見つけた場所や何に見えたかを秘密にしてクイズにするのも面白い。この学習をきっかけに、画像の貼り付けやトリミングなどの操作も簡単にできるようになった。写真を撮る→貼り付ける→ペンでかき込む等の一連の操作を体験でき、初めて MetaMoJi を活用する題材としても適している。



3. おわりに

操作に苦労していた児童も、繰り返し使うことにより、タブレットを有効なツールとして活用することができるようになってきている。使い方を覚え、ミライシードなどの新しく導入されたアプリもスムーズに使いこなせるまでになった。今回の研究を通して大切だと感じたのは、まずは「使ってみる」ということである。私自身も実践を進めていくに当たって、最初の頃は“タブレットを使うことが目的の授業”となってしまうこともあった。しかし、「使ってみる」ということを続けることによって、“授業のこの場面で使えないか”“他の学習でも活用できないか”“ここではタブレットを使った方が学習が深まるのではないか”と紐づけて考えられるようになった。今後はさらにタブレットを活用した授業が求められるようになるだろう。少しでも、低学年でどう使ったらよいか悩んでいる先生方の参考になればと思う。

数学的な見方・考え方を働かせる授業の在り方
～児童が「やってみたい！」と思う楽しい授業作り～

下名小学校 教諭 齋藤 早織

1 はじめに

本学級1年生2名の児童は、何事にも関心を持ち、意欲的に取り組んでいる。校内でアンケート調査を行ったところ、全員が算数科の勉強に肯定的だったものの、事象を比較して共通点を見つけることや、根拠や理由を基に筋道を立てて考えて発表することには消極的である。その原因として、どのような視点で捉え、考えているかを自分の言葉で表すことが難しいからだと考えられる。

2 研究の目的

学習指導要領解説において、小学校算数科の目標は三つの柱で整理された。そして、それらは「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して」育成することを目指すとして示されており、「数学的な見方・考え方」は算数科の深い学びの実現のための重要な要因であると考えられる。そこで、本研究では「B図形」の領域である第1学年「いろいろなかたち」の単元を通して、児童が図形に興味・関心を持ち、主体的に学習活動に取り組むことで、「数学的な見方・考え方」が働くであろうと考え、本主題を設定した。

3 研究の方法

(1) 数学的活動の充実

- ①ものの形を観察する視点を引き出す
- ②学習内容と日常生活をつなげる場を設ける

(2) 授業展開上の支援

- ①発問の工夫
- ②具体物を用いた活動

(3) ICT 機器の活用

- ①実物投影機によるプロセスの共有
- ②パソコンとタブレット PC の効果的な活用

4 結果と考察

(1) 数学的活動の充実

①ものの形を観察する視点を引き出す

事前に様々な立体を集めておき、第1次小単元では、それらを使って自由に遊ぶ活動を取り入れた。その際、児童が積んだり転がしたりしている様子を受けて、「どうすれば高く積み上げられるかな。」「友達よりも遠くまで転がしてみよう。」と、ものの形を観察する視点を引き出すことができるような声かけを行った。すると、児童は具体物を観察しながら形の特徴に応じて操作し、目的意識を持つことができ、形の特徴を体感してつかむことができた。

身の回りのものを様々な立体を使って表す活動で、ペットボトルのキャップを弾に見立て

て銃を作った児童がいた。実際に操作してみると、転がりやすいときと転がりにくいときがあることに気付いた。そこで、教師が「どうしたら転がるかな？」と問うと、児童は、キャップをいろいろな方向で置いたり、たくさんのキャップを集めて確かめたりして、丸いと転がりやすいという条件を見つけた。(写真1)他にも、トイレトペーパーの芯をパトライトに、ガチャガチャのカプセルをタイヤに見立ててパトカーを作った児童は、「くっつけるのが難しかった。」という振り返りをしていた。そこで、教師が「なぜだろう？」と問うと、児童は作品を観察し、「丸いから。」と答え、平らでない部分は重ねにくいということが実感できた。(写真2)



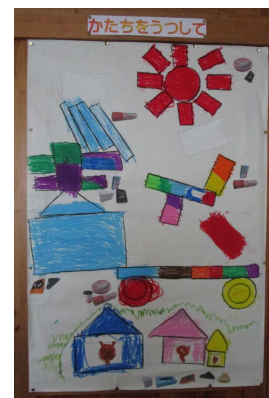
(写真1)



(写真2)

②学習内容と日常生活をつなげる場を設ける

積み木の面を写し取り、面の形の特徴を利用した絵を描く学習では、集めた多様な立体でも面を写し取る活動を行った。(写真3)積み木だけでは、同じような大きさの形しか描けないが、たくさんの種類の立体を使ったことで、様々な大きさの形を描くことができ、使う立体の大きさによって写し取った形の大きさも変わることに気付いた。「どっちの筒を使った方がいいかな?」「こっちの家を大きくして、隣の家は小さくしたいけど、ぴったりの箱はあるかな?」と立体を観察したり触ったりして取り組み、図形の属性を豊かに感じ取らせることができた。



(写真3)

単元末には、学習したことを基に、身の回りのものを作る時間を再度確保した。(写真4)初めての制作活動ではこれまでの生活経験から得た感覚で立体を選んでしたが、単元末では形の特徴や機能を生かして立体を選ぶことができた。初めての制作活動ではタイヤの部分にボールの形しか選んでいなかった児童が、単元末の制作活動では筒の形を選んでおり、形の特徴や機能を確実に捉えている変容が見られた。さらに、学校の中にも学習した形があるか調べる活動を通して「ボールの形は少ない。」「テレビ台や本棚にはローラーが付いているから移動しやすい。生活の中で役に立っている。」と日常生活と形の関わりを考察していた。立体図形とその性質を用いて身の回りの事象を理解する様子が見られ、発展的な考え方につながった。



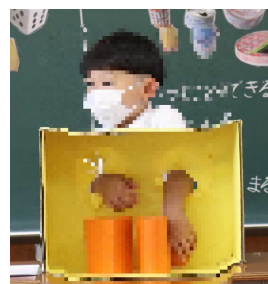
(写真4)

数学的活動を充実させたことにより、児童は授業外でも積極的に図形に関わろうとしている場面が見られた。学習して得た立体の特徴や機能を基に立体を選び、ボーリングをして遊んでいる児童がいた。その他にも、家庭から持ってきた立体だけでなく、色鉛筆や数図ブロックなど学校にある身の回りのものの形を写し取る児童もいた。

(2) 授業展開上の支援

①発問の工夫

児童が考えを発表したときに問い返しを行い、根拠や理由を発表する場を設けた。そうすることで、形の特徴や機能に着目して判断したことを共有できただけでなく、児童は見て分かるものでも自分の言葉として表現しようとし、言語化を図ることにつながった。箱の中にある立体を触って当てるゲームを行ったときも(写真5)、触って分かったことを言語化させることにより、立体の見た目だけでなく、形の特徴や機能を基に判断することができた。算数的な言葉で表現することで、形に対するイメージが明確になるだけでなく、下学年で得た知識・感覚が上学年での学習につながっていくため、言語化を図ることが重要だと感じた。自分の思いを言葉で表現することが難しいときには、対話的な学びを促した。そうすることで、他者の意見を聴くことができ、様々な形を捉える過程を共有することができた。



(写真5)

また、児童が自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにしたいと考え、自分と他者の意見を比較・検討することができるような発問も取り入れた。自分と友達の考えを比べ、「どこが同じで、どこが違うか。」「どうして違うのか。」といったことを考える場を設けることで、数学的な見方・考え方を働かせ、共通点と相違点を見いだすことができた。

②具体物を用いた活動

立体を仲間に分ける学習の際に、教科書の絵を見て頭の中で考えるのではなく、似た立体を実際に用意して、触ったり観察したりすることができるようにした。そうすることで立体の特徴や機能について、実感をともなった理解ができた。そして、立体の大きさや色、材質などを捨象し、ものの形や機能的な性質に着目しながら仲間分けをすることができた。身の回りのものから「はこの形」「つつの形」「ボールの形」を見つける活動で



(写真6)

は、オセロの駒を見て、「丸いから。」という理由でボールの形と答えた児童がいた。そこで実際に触って確かめさせると、「丸いけど、平たい面がある。」「転がるし、積むことができそう。」ということに気付き、ボールの形ではなく、つつの形だということに気付いた。(写真6)

(3) ICT 機器の活用

①実物投影機によるプロセスの共有

積み木の面を写し取る活動において、個別学習のときにはノートに描かせ、全体で共有するときには実物投影機を活用した。実物投影機を使うと、どの積み木を使ってどのように写し取ったのかを実際に操作しながら発表することができた。また、見せたいところを容易に拡大することができるため、ものの形の特徴を強調して視覚に訴えることができ、児童の理解につながった。

②パソコンとタブレット PC の効果的な活用

多様な考え方に触れることができるよう、近隣小学校の1年生とパソコンでZoomを使った遠隔授業を行い、様々な立体を使って制作した作品を紹介し合う時間を設定した。(写真7) 児童は、頑張ったことや工夫したところを、形の特徴や機能を踏まえて伝え合うことができた。列車を作っている児童はどちらの学校にもおり、本校の児童はボールの形でタイヤを再現していた



(写真7)

たのに対し、近隣校の児童はつつの形でタイヤを再現していた。交流を行ったことで転がすことができる立体は1つではないことを再確認した。また、Zoomを使ったことで、言葉で伝えるだけでなく、児童同士が実際に操作している場面を見せることができたため、形による機能を共有しながら、語彙が少ない1年生でも自分の思いや考えを伝えることができた。

以下は、タブレット PC (以下 PC) で活用した「MetaMoJiClassRoom」の実践である。

自分の考えを表す手立てとして用いたところ、ノートに書く場合は訂正するときに時間がかかるが、PCだとすぐに訂正することができ、集中して取り組むことができた。また、ホワイトボードに書く場合は消してしまうと学習の軌跡が残らず児童の変容が分かりにくいですが、PCだと保存をするといつでも振り返ることができ、印刷をするとノートに残すことができた。

第1学年では直接目で見たものを扱った学習を行うが、学年が上がるにつれ、念頭操作で考える学習が多くなっていく。そこで、その中間的な役割としての活用も図った。内蔵カメラで撮った写真にももの形を書き込むよう指示をしたところ、立体の特徴や機能を理解して書き込んでおり、具体物を抽象化する力につながった。(写真8) また、PCを使用したことにより、撮った写真にすぐ文字を書き込むことができ、児童の興味・関心が薄れることがなかった。



(写真8)

学習内容が定着するよう、PCでも練習問題に取り組むようにした。本時だけでなく前時までの学習にもすぐ戻ることができたり、第1学年でも自分で答え合わせができたりするなどの利点があった。また、自分で問題を作って友達に出し合う際は、画面共有ができ児童は集中して取り組むことができた。さらに、他学年の児童に問題を出す際は、1台のPCで全員の問題を表示することができ、スムーズに取り組むことができた。

5 おわりに

上記のような取組は、「数学的な見方・考え方」を働かせるには、大変効果的であった。しかし、問い返しを行った際、同じような意見しか出なかったり、2名ともがつかずいてしまったりする場面があった。自力解決のときの児童一人一人の姿を観察して、柔軟に対応する必要があると感じた。また、ICTを活用する目的を明確にするべきである。写真では立体を一方向でしか観察ができず「数学的な見方・考え方」が働かせられなかった。また、画面共有は考え方の共有ではなく、言葉で表現する際により分かりやすくするための手段の一つである。ICT機器の利点を活用しつつ、実際に触ってものの形の特徴を感じる事が大切であると感じた。

研究主題 自他の大切さを認め、互いに支え合える仲間づくりをめざして
～生徒の成長を信じた指導・支援のあり方～

池田中学校 教諭 徳善 咲紀

1 はじめに

本校は、231名の生徒が在籍しており、校区内外の十数校の小学校から入学してくる。明るく素直で何事にも一生懸命取り組む生徒が多く、中学校で出会う友達と新たな人間関係を築きながら、いきいきと学校生活を送っている。しかし、うまく関係を築くことができず悩む生徒や、登校する意義を見出せない生徒もいる。さらに、学力や集中力、コミュニケーション力など様々な課題を抱える生徒もいるが、その一人一人の特性や課題は見えにくく気づきづらい。

2 研究の視点

様々な支援を要する生徒がいる中で、教員だけでなく、生徒同士がその特性を理解し合い、互いに認め合える集団づくりが必要であると考え。そこで、生徒や地域の実態を踏まえた人権学習に取り組むとともに、自他の大切さを認め、互いに支え合える仲間づくりができる生徒の育成をめざし、本研究に取り組んだ。

3 実践事例

(1) 各学年での取組

① 第1学年での取組

「年齢や障がいのあるなしに関わりなく、誰もが互いに認め合い、地域でいきいきと暮らしていける共生社会」をめざして、様々な体験を交えて学習した。障がい者スポーツを通して、「歩けないことが障害なのではなく、車いすでバスに乗れなかったり、店に入れなかったりすることが障害だ。それは私たちが作ってしまっている壁かもしれない。私たちの手で壊したい。」と意見を書いた生徒がいた。体験を通して学ぶことで、色々な人の立場に立って考えることができ、障害はその人の中にあるのではなく、社会の中にあることに気づき、自分のできることを考え行動しようとする意欲を高めることができた。



② 第2学年での取組

防災学習や災害時における人権問題の学習に取り組み、生命の尊さと自他を大切にすることについて学習した。震災の新聞記事を読んで要約し、学んだことや今後にかかすことをレポートにまとめた。また、「釜石の奇跡」を視聴し、自分事として捉え始めた生徒もいた。さらに、防災講演会で被災の体験談を聞いたり、避難所の疑似体験をしたりして、日本各地で起こる度重なる災害を他人事ではないと強く感じ、災害発生時に社会の一員として、「中学生の自分が率先避難者となって行動しなければならない」と意識を高めた。平和学習では、戦争の悲惨さや非人間性を知り、二度と戦争を繰り返してはいけないという決意のもと、平和の尊さと生命の尊厳を大切に学習を重ねている。

③ 第3学年での取組

総合的な学習では、地域の良さや課題について学んだ。ふるさとに誇りを持ち、ふるさとを守るために自分にできることは何か考えた。また、就職差別や結婚差別を通じた人権学習では、理不尽な差別の実態を知り、「なぜ残されてきたのか」との疑問も出てきた。そして、差別をしない生き方がすべての人の幸せにつながることや、強い信頼関係を築くことで部落差別の壁を乗り越えることができることを学び、「私たちがなくしていかないといけない。」と決意を発表する生徒がいた。さらに学習を重ね、人の立場や気持ちに思いを寄せ、互いが積極的にかかわってつながる温かい人間関係を築かせたい。



(2) 家庭や関係機関との連携

多様な生徒の特性や背景を含めた課題を把握し、個にあったかかわりができるよう教員間で頻繁に情報交換をし、共通理解を図っている。必要な場合には、外部から講師を招き研修の場を設けるなど、学校としてできることを職員一丸となって常に模索している。また、関係機関とも情報交換や相談を積極的に行い、広い視野で、個にあったかかわりができる体制づくりを進めてきた。不登校の生徒には、その生徒や保護者の気持ちに寄り添いながら連絡を密にとり、つながりを築いている。同時に、関係機関とも連携し、本人の意思を尊重した進路選択ができるよう心がけてきた結果、新しい環境で楽しく充実した高校生活を送ることができている卒業生もいる。

(3) Aさんと周囲の変容

①Aさんを迎えて

Aさんは、ダウン症で特別支援学級に所属しており、明るく活発で、人とかかわることが大好きである。しかし、自分の思いを言葉で伝えることが苦手で、突発的に走り出すこともあり、危険な場面が見受けられた。そこで、Aさんの安全確保のために校内を点検し、危険な場所には施錠をするなど安全対策を行った。職員間でも対応を共有し、学校全体で見守る体制をつくった。しかしながら、学校生活の中で不安や緊張を感じる事が多く、授業や活動に参加できないことも多かった。Aさんと関係を築こうとしている生徒もいたが、Aさんは周りとうまく関係を築くことができず、教員もAさんとのかかわり方を模索する日々であった。

②周囲の生徒とのかかわりを通して

入学当初、周囲の生徒は、Aさんを避けたり、話し方を真似したり、Aさんが話しかけてもそっけない様子が見られ、決してAさんと対等に接しているとは言えなかった。Aさんにとって学校が居心地の良い場所になるために、生徒同士のつながりを築いていこうと学年団で確認し合った。まず、Aさんの特性を生徒に伝えることが必要だと考え、どのように伝えるか保護者と相談する中で、Aさんの思いや保護者の願いを知った。学年集会を開き、Aさんの特性や適切なかかわり方について、保護者の願いや担任としての思いも含めて生徒たちに話をした。生徒たちは最後まで顔を上げて話を聞き、「Aさんだからと他の人とは違う接し方をしていたことを反省した」「これまでAさんとのかかわり方がわからなかったが、もっと仲良くなりたい」「自分も苦手なことはあるので、お互いの良いところを見つけて支え合いたい」との思いをもつことができた。

合唱コンクールの練習をしているとき、教員や保護者からどれだけ声をかけてもAさんは練習

に参加しようとしなかった。本番が近づいたある日、友達数名が「Aちゃん、一緒に行こう！」と誘いにきた。すると、それまで頑なに拒んでいたAさんが、すっと立ち上がり、嬉しそうに走って練習に加わった。練習後、Aさんは、「みんなと一緒にしたいけど出来なかったらどうしようって思ってたけど、誘いにきてくれて嬉しかったんよ。」と笑顔で話してくれた。Aさんが自分の思いを初めて素直に表現してくれた瞬間だった。友達とのつながりがAさんの心を開いてくれたと感じた。当日、学級の真ん中で大きな口を開けて歌っている姿はとても印象的だった。友達との関係は少しずつ縮まっていったものの、Aさんは、気持ちとは反対に過剰な接触や、時には暴力的なかかわり方をすることもあり、友達とのトラブルが多くなった。そこで、Aさん自身が適切な距離感を学ぶ必要を感じ、SSTを取り入れるとともに、人とかかわり方についての約束事を決め、教員や学年の生徒たちとも共有した。すると、周りの生徒も嫌なことは嫌だと伝えたり、いけないことは注意したりする場面が増えた。2年生の終わりの校外学習では、友達と笑顔でお弁当を食べ、買い物を楽しむAさんと生徒たちの姿が見られ、大きな成長を感じた。

③ 3年生になって

3年生になり、これまでのたくさんの経験の中で自信をつけたAさんは、教員からの手助けを必要としなくなってきた。困ったときには友達に頼り、周りの生徒も「してあげる」ではなく、「一緒に考える」という姿勢でAさんに接している。5月の体育祭、Aさんは全ての練習に参加し、本番を迎えた。学級対抗リレーで一生懸命に走るAさんを、学級・学年を越えて大きな拍手で応援する全校生徒の姿に心から感動した。走り終わった後、友達とハイタッチをするAさんの笑顔は輝いていた。7月の人権問題意見発表会、Aさんと3年間同じ学級で過ごしたBさんは、「Aさんと出会って2年が経ち、うまくコミュニケーションがとれず、悲しい気持ちになったこともあったが、何度もAさんに助けられてきた。お互いに間違っていることを指摘することは大切だと思うし、周りの対応の仕方や行動によって、良い方向に進むことができるのではないかと。一緒に過ごせる時間を大切にしたい。」と自分の思いを語った。それは、学年全体の思いを代弁しているかのようであった。9月の文化祭前日、学級では工作が好きなAさんの良さが出るように役割を決め、全員で準備に取り組んでいた。当日も、学級の友達と一緒にバザーを回ったり、友達に助けってもらいながら係の仕事に取り組んだり、いきいきとしたAさんの姿が見られた。その様子から、Aさんだけでなく、すべての生徒の成長を実感するとともに、互いの特性を理解し支え合える集団となりつつあるのではないかと頼もしく感じた。



4 おわりに

「教師」という仕事の魅力は、生徒の成長に寄り添いながらも、生徒の姿から学び、ともに成長できることだ。Aさんとかかわりを模索しながら、生徒たち自身も自らの課題と向き合い成長してきた。失敗もしながら互いの良さを認め合い、少しずつ関係を築いてきた3年生の成長を今誇らしく感じている。Aさん以外にも様々な課題や背景をもった生徒がいる。目の前の生徒と真摯に向き合い、生徒の些細な変化や抱えている思いを敏感に感じ取り、ともに成長していける教員集団でありたいと思う。生徒たちが主体的に考え行動する中で、互いを理解し合い、支え合える集団づくりができるよう、これからも支援していきたい。

研究主題

自尊感情を高める豊かな人間性の育成

～自分を愛し、他人を思いやる心あふれる人間関係づくりの育成を目指して～

山城中学校 教諭 仁尾 芳人

1 はじめに

山城中学校は、昭和22年に開校し、昭和47年に3中学校1分校を、平成12年には大野中学校を統合し、山城町内唯一の中学校となっている。そのため校区がたいへん広く、山間部にまで広がっており、8割以上の生徒がスクールバスや路線バスなどの交通機関を利用して通学している。

校舎は、全国的にもあまり例のない公民館との併設校舎で、木の温もりがあり、地域と共に歩む教育と文化の交流施設として平成18年に完成し16年目を迎えている。

ここ数年生徒数が急減しており、本年度は、生徒数34名、教職員数16名で、各学年1学級と知的・情緒の支援学級2学級の計5学級から成っている小規模校である。

現在は本校の教育目標である「郷土を愛し、心豊かに、たくましく生きる生徒の育成」をめざし、教職員一丸となって、日々の教育実践に取り組んでいる。



2 研究の目的

本校の生徒は少人数ではあるが、様々な活動に意欲的で、学習や部活動、学校行事等に一生懸命取り組んでいる。また、とても素直でやさしい生徒が多い。

一方で現在は2校の小学校から入学してくるため、顔なじみにおけるマンネリ化や人間関係の固定化、地域の人々とふれあう機会の減少などにおいて、人前で自分の考えに自信をもって発表できなかったり、他人を思いやり自ら進んで行動できなかったりと、積極性に欠ける面も見られる。

そのため、異年齢の人々と多くふれあえる機会をもたせて自尊感情を高め、自分に対する自信や相手の気持ちを思いやって行動できる心がもてるように人間関係づくりの育成に取り組んだ。

3 研究の方法

○朝の時間を利用して実践する

「絵本の読み聞かせ」を通して、ボランティアの方とのふれあいの場を各教室で行う。また、学年を超えて、異学年と協力して校舎周りの「ボランティア清掃」に取り組みせる。

○発表する場を設定する

「人権集会」を開き、身近な問題から社会的な問題にいたるまでの人権問題について考えさせる。また、「生徒総会」を通して、学校をよりよくするための提案や要望などについて議論する場をもたせる。

○ゲストティーチャーを招く

三好市社会福祉協議会山城支所の方を本校に招き、高齢者や障がい者の「福祉体験」を行う。また、「コミュニケーション活動」では、劇団の方を招き、表現力や創造力を高める。

4 結果と考察

(1) 朝の絵本の読み聞かせ

絵本による読み聞かせは、ボランティアの人々とのふれあいだけでなく、登場人物の様々な感情を抱くため、想像力が豊かになり相手の気持ちを感じ取ることができる。そのため、この実践を通して、思いやりを持って友だちと接することができるようになった。しかし、相手の気持ちを感じ取れずに自分の思いだけを伝える場面もあり、間をおいてじっくり考えて伝えることが今後の課題である。



(2) 朝のボランティア清掃

生徒会や人権・ボランティア委員会の生徒を中心に、月曜日の朝、登校時に学校周辺の清掃活動を実施している。生徒たちの呼びかけにより徐々に参加する生徒が増え、これらのボランティア活動を通して、奉仕の精神や勤労の尊さだけでなく、学年に関係なく接して協力して行う心を育成することができた。しかし、参加をしない生徒もいるため、全員参加ができるよう呼びかけることが今後の課題である。



(3) 人権集会・生徒総会

人権集会は、人権意見発表会後に行われ、身近な問題から社会的な問題にいたるまでの人権問題について、人権ボランティア委員会の進行のもと自分の考えや思いを発表することができていた。また、生徒総会でも同様に学校をよりよくするための提案や要望などについて議論できていた。しかし、発表する生徒が限られており、発表しない生徒が勇気を出して自分の思いを伝えることができるように授業等でも話し合う場を設定することが必要だと感じている。



(4) 福祉体験

福祉体験では、高齢者や障害のある人の疑似体験を行った。ゴーグルや重りをつけての高齢者体験では、普段は何も感じないのに、歩いたり水を入れ替えたりする困難さを実感できた。また、視覚に障がいをもつ人の体験では、階段の昇降の大変さや隣で声をかけ支えてくれている人の思いやりの心を知ることができた。今後は、実際にその場面に遭遇した際に、生徒自らが支援することができるかが課題である。



(5) コミュニケーション活動

演劇分野のプロの指導を通してコミュニケーションの方法を体験した。劇団「スーパーエキセントリックシアター」の2名の方に、ダンス指導や演技指導を通して、表現する手法や創造力を高める方法を学び、行動面では大変向上することができた。しかし、自分の考えを相手に伝えることができる一方で、大きな声で発表したり、身振り手振りで表現したりすることが今後の課題である。



5 おわりに

以上の取り組みにおいて、「自分を愛し、他人を思いやる心あふれる人間関係づくりの育成」には、自尊感情を高める教育活動が大変、重要だと考える。今年度だけでなく、来年度にもつながるように豊かな人間性の育成に取り組んでいきたい。そのため、教育活動全体を通じて日々、支援・援助していくことが大切である。

令和3年度 教育研修・研究事業報告

1 研究主題

『変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成』

2 事業

(1) 調査研究

- ア 教育課程の研究
- イ 複式の特性を生かした学習指導方法の研究
- ウ 情報教育についての研究
- エ 地域の教育力を生かした教育活動の研究
- オ 生徒指導にかかわる諸問題の調査研究
- カ 各種研究会への参加と研究物の収集
- キ 購入図書・DVD等の紹介

(2) 各種研究会及び研修会の開催・共催

- ア 教育研究推進協議会・教育研究所協力委員会
6月 2日（水）
- イ 情報教育研修会（小教研情報教育部会と共催）
8月 17日（火） 夏季研修会（三好教育センター）
10月 26日（火） コンピュータ作品審査等（三好教育センター）
2月 7日（月）～18日（金）授業研修会[昼間小学校]（オンデマンド配信）
- ウ 複式教育研修会（小教研へき地・複式部会と共催）
8月 3日（火） 現場研修会（吾橋小学校）
- エ 人権教育研究会（三好郡市学校人権教育研究大会後援）
文書発表 就学前分科会（政友保育園）
11月 10日（水） 小学校分科会（東祖谷小学校）
10月 29日（金） 中学校分科会（西祖谷中学校）
11月 24日（水） 高等学校・特別支援学校分科会（池田高等学校辻校）
- オ 新任管理職研修（新型コロナウイルス感染症のため中止）
- カ 学校運営研修会（教頭・中堅教員研修会） 参加者26名
開催日と講師
6月 17日（木） 講義1 田岡 茂樹（三好教育研究所長）
24日（木） 講義2 小谷 千恵（元池田中学校事務室長）
7月 1日（木） 講義3 熊澤 浩己（西祖谷中学校長）
8日（木） 講義4 中上 斉（池田中学校長）
15日（木） 講義5 野口 幸司（徳島新聞NIEコーディネーター）
22日（木） 講義6 伊丹 賢治（四国大学准教授）

オ～カ「三好教育振興協議会」との連携による事業

(3) 研究委嘱，研究協力校（園）への指導・助成

- ア 研究発表校
三縄幼稚園・辻小学校

イ 研究協力校・園（令和4年度発表校）

加茂小学校・三好教育研究所

ウ 委嘱研究員

幼稚園	2区	辻幼稚園	佐藤 知美	主任教諭
小学校	1区	足代小学校	槇山万莉菜	教諭
	2区	王地小学校	笹田 季生	養護教諭
	3区	池田小学校	中妻 美穂	教諭
	4区	下名小学校	齋藤 早織	教諭
中学校	3区	池田中学校	徳善 咲紀	教諭
	4区	山城中学校	仁尾 芳人	教諭

(4) 各研究会，団体等との協力

ア 三好教育会

イ 三好郡・市小学校教育研究会，三好郡・市中学校教育研究会

ウ 三好郡・市学校人権教育研究協議会

エ 三好郡・市各幼稚園・小学校・中学校

オ 中・四国教育研究所連盟

カ その他教育関係諸機関

3 研究成果の発表及びその普及

(1) 三好教育研究発表会

日時 令和3年8月19日（木） 13：30～16：15

会場 オンライン開催（三好教育センター，徳島県立総合教育センター，三好郡市各校園 他）

○研究発表

・三縄幼稚園 研究主題

子どもの姿から考える幼小の接続について

～遊びから学びへ向かう子どもたち～

発表者 真鍋 友子 主任教諭（現 白地幼稚園）

・辻小学校 研究主題

持続可能な食環境（食育ベース）の構築と「食の力」を身に付けた児童の育成

～「マスク・手洗い消毒・3密を避ける」だけじゃない！！『体の中からコロナ感染予防対策』～

発表者 大岩 彩菜 教諭

○講演

演題 「ポジティブな行動支援で幸せな園・学校づくり」

講師 樋口 直樹氏（徳島県立総合教育センター 特別支援・相談課 指導主事）

(2) 研究紀要（第62集）の発行と研究所報（第102号）の発行

各学校・園，各研究機関に送付

(3) ホームページ等による広報活動

(4) 研究員による研究成果のまとめと報告（県教育委員会へ提出）

(5) 三好教育振興協議会の事務

各種調査・整理，会議の運営など

歴代委嘱研究員一覽(平成元年～)

幼稚園・小学校

年度	幼稚園		小学校			
	幼稚園	小学校1区	小学校2区	小学校3区	小学校4区	小学校5区
H1	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫛生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
2	国見マチ子(絵堂幼)	藤本政義(王地小)	天竹勉(昼間小)	吉岡弘恵(池田小)	森勝正(河内小)	森本義博(櫛生小)
	斎藤光子(三野幼)	坂野町子(三庄小)	前川順子(辻小)	久保徹(箸蔵小)	小笠健二(大野小)	和田初枝(落合小)
3	山口悦子(増川幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	細川文男(櫛生小)
	横田嘉代子(昼間幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	松村直也(和田小)
4	佐々木隆子(東山幼)	大瀧和彦(加茂小)	為実敬子(西井川小)	武内隆史(出合小)	竹野啓治(大和小)	松村直也(和田小)
	井上淳子(足代幼)	小笠松美(王地小)	藤野圭一(足代小)	真鍋宏実(馬場小)	篠原聡(下名小)	細川文男(櫛生小)
5	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	田中敬子(上名小)	谷恒二(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	志磨昭子(大和小)	大塚一志(栃之瀬小)
6	岡久尚子(白地幼)	辻宏明(芝生小)	中川糸子(足代小)	坂本武彦(白地小)	志磨昭子(大和小)	大瀧和彦(吾橋小)
	矢野聡子(出合幼)	田岡茂樹(加茂小)	齋藤孝(西井川小)	伊丹賢治(三縄小)	田中敬子(上名小)	大塚一志(栃之瀬小)
7	大久保珠美(池田幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	國金砂恵子(野呂内幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
8	國金砂恵子(川崎幼)	松田徳子(王地小)	真鍋宏実(昼間小)	中川法子(池田小)	井後辰哉(政友小)	濱口久弥(吾橋小)
	大久保珠美(池田幼)	中川斉史(三庄小)	土井清子(井内小)	川人成子(三縄小)	峯川郁代(山城小)	森本誠司(落合小)
9	岡尾千恵(下名幼)	原敏二(三庄小)	中川貴史(昼間小)	篠原晃代(馬路小)	小笠原誠(平野小)	徳善之浩(名頃小)
10	木村恵美子(西岡幼)	野町孝英(芝生小)	石井文子(辻小)	島田晴代(野呂内小)	篠原義正(河内小)	岩崎順子(善徳小)
11	三木香代(西庄幼)	森北直樹(加茂小)	中村瑞穂(足代小)	山下史記(佐野小)	河野通之(大野小)	向井ひろみ(菅生小)
12	渡辺千枝(三野幼)	平田公彦(太刀野山小)	小角昌美(西井川小)	三好美智代(西山小)	谷口政代(下名小)	品川知美(櫛生小)
13	岡本久美(西井川幼)	三橋洋子(西庄小)	今川仁史(東山小)	生藤元(箸蔵小)	三橋泰(落合小)	
14	大西恒子(井内幼)	喜多とよみ(王地小)	細谷加代子(井内小)	近藤直美(池田小)	瀧下光子(西宇小)	
15	山中あけみ(箸蔵幼)	樋口隆則(絵堂小)	加藤公夫(昼間小)	近藤明美(三縄小)	松浦理恵(善徳小)	
16	新居利枝(馬路幼)	松代容子(芝生小)	福田ミカ(辻小)	松下寛興(白地小)	井上清隆(栃之瀬小)	
17	古井智恵子(善徳幼)	武田淳子(三庄小)	佐藤仁美(足代小)	向井ひろみ(馬路小)	山中祐二(大野小)	
18	谷本紀子(大野幼)	平尾佐知子(加茂小)	北川ひとみ(王地小)	渡邊真弓(川崎小)	岡本悟(櫛生小)	
19	佐藤重美(東山幼)	平野貴志(東山小)	豊田昌弘(西井川小)	木内晃(佐野小)	猪子研司(和田小)	
20	鳥首こずえ(加茂幼)	邊見明美(絵堂小)	井原理恵(芝生小)	宮本真吾(西山小)	河野恵子(山城小)	
21	大西照子(西井川幼)	和田光司(西庄小)	小角昌美(井内小)	中妻稔子(箸蔵小)	森祐大(吾橋小)	
22	釈子育香(井内幼)	森幸子(昼間小)	松本珠実(王地小)	永山睦子(池田小)	清重正俊(栃之瀬小)	
23	城尾春菜(池田幼)	小角聡志(加茂小)	平尾昌彦(辻小)	安藤久子(三縄小)	平岡千佳(政友小)	
24	元木真砂代(池田幼)	近藤博美(三庄小)	園尾淑子(芝生小)	神谷美樹(白地小)	岩崎真人(櫛生小)	
25	石井やよい(昼間幼)	大久保智江(足代小)	中瀧由紀(井内小)	石丸美穂(馬路小)	福田浩司(東祖谷小)	
26	田岡あけみ(三庄幼)	大西三千代(昼間小)	木村栄治(王地小)	瀧本恭代(川崎小)	喜多芳恵(下名小)	
27	真鍋友子(辻幼)	大西勇貴(加茂小)	藤川美香(西井川小)	新藤茂美(箸蔵小)	長岡鷹太(吾橋小)	
28	加藤由美(辻幼)	木村麻紀子(三庄小)	玉木恵子(芝生小)	上浦大輔(池田小)	瀧下光子(政友小)	
29	岡尾千恵(山城幼)	岡田直人(足代小)	岡慎太郎(辻小)	松本美穂(三縄小)	竹内友梨(山城小)	
30	山本眞由美(白地幼)	曾我部悦嗣(昼間小)	大西利江子(王地小)	中川法子(白地小)	岩崎順子(櫛生小)	
R1	藤川孝子(足代幼)	鮎川美加(加茂小)	伊丹智子(西井川小)	前田泉季(馬路小)	喜多芳恵(山城小)	
2	宮成典子(加茂幼)	筆本晴香(三庄小)	徳永直(芝生小)	高田寛子(箸蔵小)	中岡加代子(東祖谷小)	
3	佐藤知美(辻幼)	横山万莉菜(足代小)	笹田季生(王地小)	中妻美穂(池田小)	齋藤早織(下名小)	

歴代委嘱研究員一覧(平成元年～)

中学校

年度	中 学 校				
	中学校1区	中学校2区	中学校3区	中学校4区	中学校5区
H1	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
2	坂部栄子(三野中)	頭師正明(井川中)	小島治子(池田一中)	大畑知(大野中)	住友恵子(西祖谷中)
3	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	島本富美子(東祖谷中)
4	新居克佳(三加茂中)	嵯峨久明(三好中)	西岡ひとみ(池田中)	佐藤英一郎(山城中)	玉木富美子(東祖谷中)
5	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
6	尾関英知(三野中)	井川秀樹(井川中)	入江宏明(池田一中)	西浦陽子(大野中)	三橋和博(西祖谷中)
7	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
8	上田尚(三野中)	元木康代(三好中)	村上義昭(池田中)	山田泰弘(山城中)	邊見隆史(東祖谷中)
9	三好康彦(三加茂中)	国友博司(井川中)	伊丹尚子(池田一中)	大西恭司(大野中)	鳥本清(西祖谷中)
10	青山貴幸(三野中)	上田美恵(三好中)	坂本浩江(池田中)	田村裕(山城中)	大谷一幸(東祖谷中)
11	平尾治美(三加茂中)	藤本恒幸(井川中)	尾崎真紀(池田一中)	新見哲也(大野中)	大倉俊之(西祖谷中)
12	宮成万寿美(三野中)	川人勝久(三好中)	内田公生(池田中)	白井正道(山城中)	宮成誠樹(東祖谷中)
13	玉木富美子(三加茂中)	川人祐子(井川中)	西岡ひとみ(池田一中)	板東祥子(西祖谷中)	
14	辺見俊二(三野中)	入江宏明(三好中)	川人恵美(池田中)	根津道子(東祖谷中)	
15	坂部公章(三加茂中)	山内幸子(井川中)	高田和枝(池田一中)	大谷一幸(山城中)	
16	村上義昭(三野中)	野田圭祐(三好中)	峰友真弓(池田一中)	安田恵(西祖谷中)	
17	玉木利典(三加茂中)	立花久(井川中)	久保喜昭(池田中)	岡本博一(東祖谷中)	
18	木藤和恵(三好中)	宮浦理恵(三野中)	沖原真紀(西祖谷中)	丸岡美枝(山城中)	
19	藤本智恵(三加茂中)	大石さえ子(井川中)	中川浩幸(池田一中)	ナサーニョ・デネビー(東祖谷中)	
20	垂水恵子(三好中)	窪田和弘(三野中)			
21			尾嶋麻子(池田中)	山口雄三(山城中)	
22	渡辺仁(三加茂中)	近藤幸(井川中)			
23			常村淳(西祖谷中)	山口義明(東祖谷中)	
24	片山徹(三好中)	小出真理子(三野中)			
25			細川誠治(池田中)	峰友真弓(山城中)	
26	佐藤篤史(三加茂中)	伊藤憲志(井川中)			
27			芳川未弥(西祖谷中)	岡田祐佳(東祖谷中)	
28	石崎雄一(三好中)	石橋洋平(三野中)			
29			平尾昌彦(池田中)	西昭弘(山城中)	
30	天竹雄紀(三加茂中)	三好佐知(井川中)			
R1			谷口真美(西祖谷中)	藤村美咲(東祖谷中)	
2	大田悦彰(三好中)	入交理子(三野中)			
3			徳善咲紀(池田中)	仁尾芳人(山城中)	